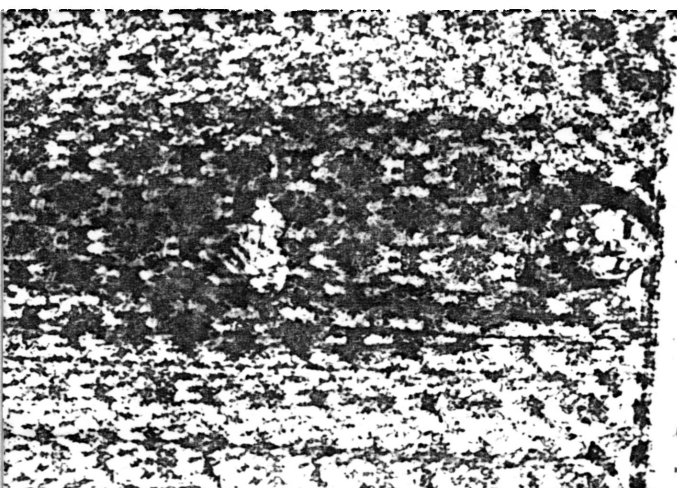


Contact: KAZUO FUJIMOTO Flat 12, Izumi-so  
3-43-2 Koenji-minami, Suginami-ku  
Tokyo 166 JAPAN Phone: 03-318-2298

5C-04 Gesoloworks / Geso



5C-04 GESOLOWORKS / GESO

side a:

1. Gli-gla (1976.8.26)
2. Therapeutai (same as above)
3. Pinkrafdreamt (1976.10)\*
4. Testone #2 (1978.6.6)
5. Begin The End (1976.10)
6. One Man Battle (1976.10)
7. Improvisation 10 (1978.10.11)

side b:

1. No Playing Guitar (1978.7.20?)
2. Dutchpolicecircus (1978.7.29)\*\*
3. Improvised Piece V (1978.11.17)
4. Out Of The Blue... (1978.8.24)
5. Ashuran (1978.12.9)\*\*\*
6. Improvisation II (1978.12.21)
7. Improvisation IV (same as above)
8. Sweet Tune (1979.2.24?)

Performed/Produced/Recorded by Geso  
at Geso's flat in Kyoto except \*at  
Drugstore (Kyoto), \*\*at Onnyk's  
(Morioka), \*\*\*at Jojo's (Kyoto).

☆一つの原因が一つの結果を生む、という様な単純な因果律など存在しえない。多様な原因が多様に絡み合って多様な結果を生み続けているいる状態を任意に切り取り分析していくつかの因果関係のモデルを提示する、というのが実際であり、ここで既に《原因》《結果》という概念は殆ど意味を成さなくなっているのは自明のことである。

☆だから、例えば僕が何故即興演奏（それは単純に、文字通り、即興的に行われる演奏のことである）を始めたのか、という理由＝原因を説明することは殆ど不可能である。せいぜい、「理由めいたもの」として、即興演奏を始めた頃の状況を断片的に述べることぐらいしかできない。

☆僕が初めて「意識的に」即興演奏を試みたのは、1976年の夏であった。当時、僕は《作品》という概念にやりきれないいらだちを覚え始めていた。当然、「作られたもの」としての《音楽》に対しても、....「あらゆる作品は窮屈だ」「あらゆる作品は不自然だ」という、かなり極端な考えにまで及びかけていたので、どんな《音楽》を聴いても楽しむことができなくなっていた。

☆思えば、更に以前から僕にはそういう傾向があったようだ。実際、僕は実にさまざまな《音楽》を聴いてはきたが、何一つ思い入れできる《音楽》はなかった。思い入れしようと試みたこともあるが、長続きはしなかった。....どうやら僕には《ミーハー的素質》が決定的に欠けているようなのである。

☆さて、そんな頃にIncus9 (Derek Bailey - Han Bennink Duo) というレコードを初めて耳にしたのは、確かに大きな契機の一つであった、と言える。だが、別に僕は「このレコードが私の運命を変えた」などと大袈裟なことを言うつもりはない。....要するに、このレコードを聴いて、僕はそれが余りにも《音楽離れ》しているのに「呆れた」のであり、それが僕自身の《音楽離れ》をも助長した、ということである。

☆僕は、《作品》から離れる為には、《曲》を演奏するのではなく、《演奏自体》を演奏すればよいのだ、と思うに至った。だが、それは1976年の夏のことだったろうか？ 或いはもう少し後かもしれない。既に記憶は曖昧だ。《演奏》に際して、何も用意する必要がない、そんな《演奏》がしたいのである。

★ところで、このテープは、僕の単独による演奏を記録（テープとはメモ、記録或いは記念物である）した10数本のテープを元を選択した、15の断片集である。自分（達）の演奏をなるべくテープに記録するようにしたのは1978年以降のとなので、それ以前のテープは非常に少ない（ソロに関しては1977年の記録は皆無である）。

★殆どの演奏は、当時の自分のアパートで独りで行き、録音したもののだが、B-2, 5は友人宅で数人を前に演奏したものである。

★A-2はテープレコーダーのCUE機能を用いてマザーテープを通常の1.5倍の速度で再生したものを再録音したもの（マザーテープは既に紛失）。A-1, 3, 6は多重録音を用いたもの。A-5は自作のテープ・ループを再生しながら指でテープに触れてワウ・フラッターを起こしたもの（用いたテープ・ループは既に紛失）。A-4はテープ・ディレイ（1本のテープを、2台並べた同機種オープンリール・デッキに渡してかけ、一方を録音状態、もう一方を再生状態にするもの。録音された音は2台のデッキのヘッドの間隔÷テープ速度の時間だけ遅れて再生される）を用いて演奏・録音したもの。その他の演奏には、録音状操作を加えていない。

★使用音具にギターが多いのは、それが僕の持ち物であり、したがって手に取る機会が多いからにすぎない。なお、シンセサイザーは知人からの借り物である。

★これらの断片は、聴き手（時として僕自身）によって意味づけされる時のみ、素材として有効である。何の素材として？ それは多分、聴き手の《聴き方》を検証する為の素材である。既に終了した演奏の《記録》が果たせる役割はその程度のことなのだが、僕はそこに興味を抱いている。

☆音楽至上主義的な態度、求道的な態度、いずれも僕の好むところではない。基本的な問題は、常に、演奏するか／しないかという点にあるのだ。

☆僕の語ることの殆ど全ては、当然のことである。だが、それを「言うまでもなかった」とまで言い切れない状況が、僕を困らせている。....これは余り良い状況ではない。